

ピカイチ先生の  
生活経営セミナー

2018年07月

システムで考える経済問題  
(① 閉じた組織と人間)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com

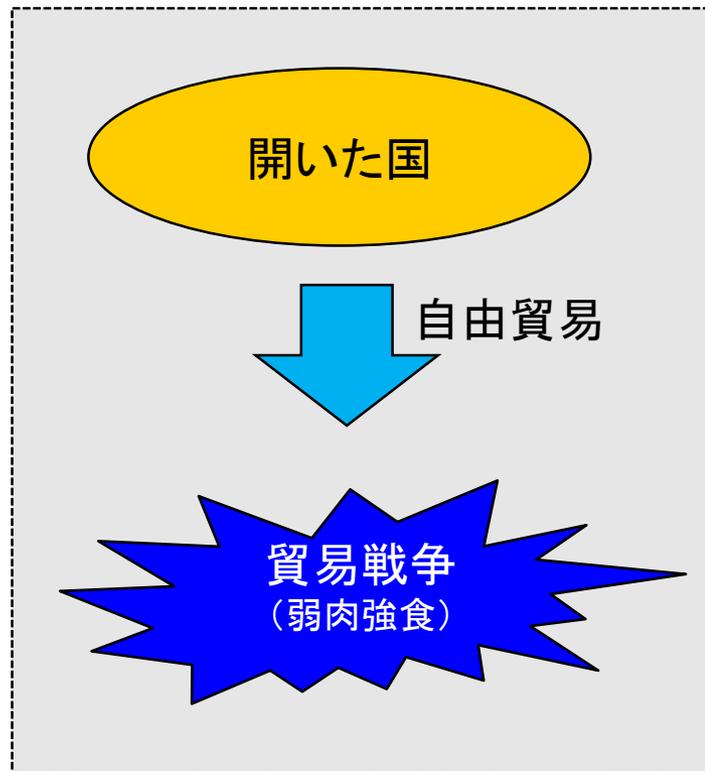
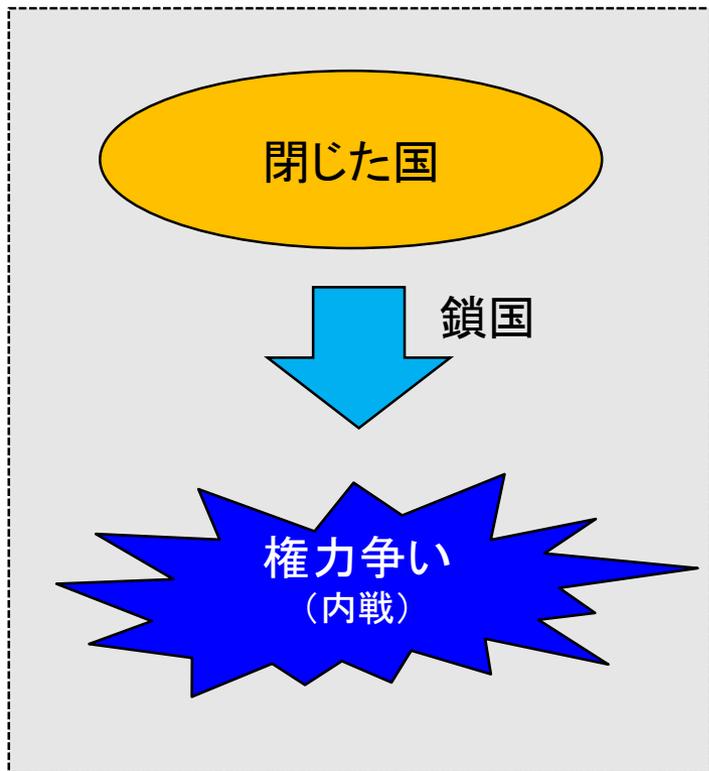


ピカイチ先生

ピカイチ先生

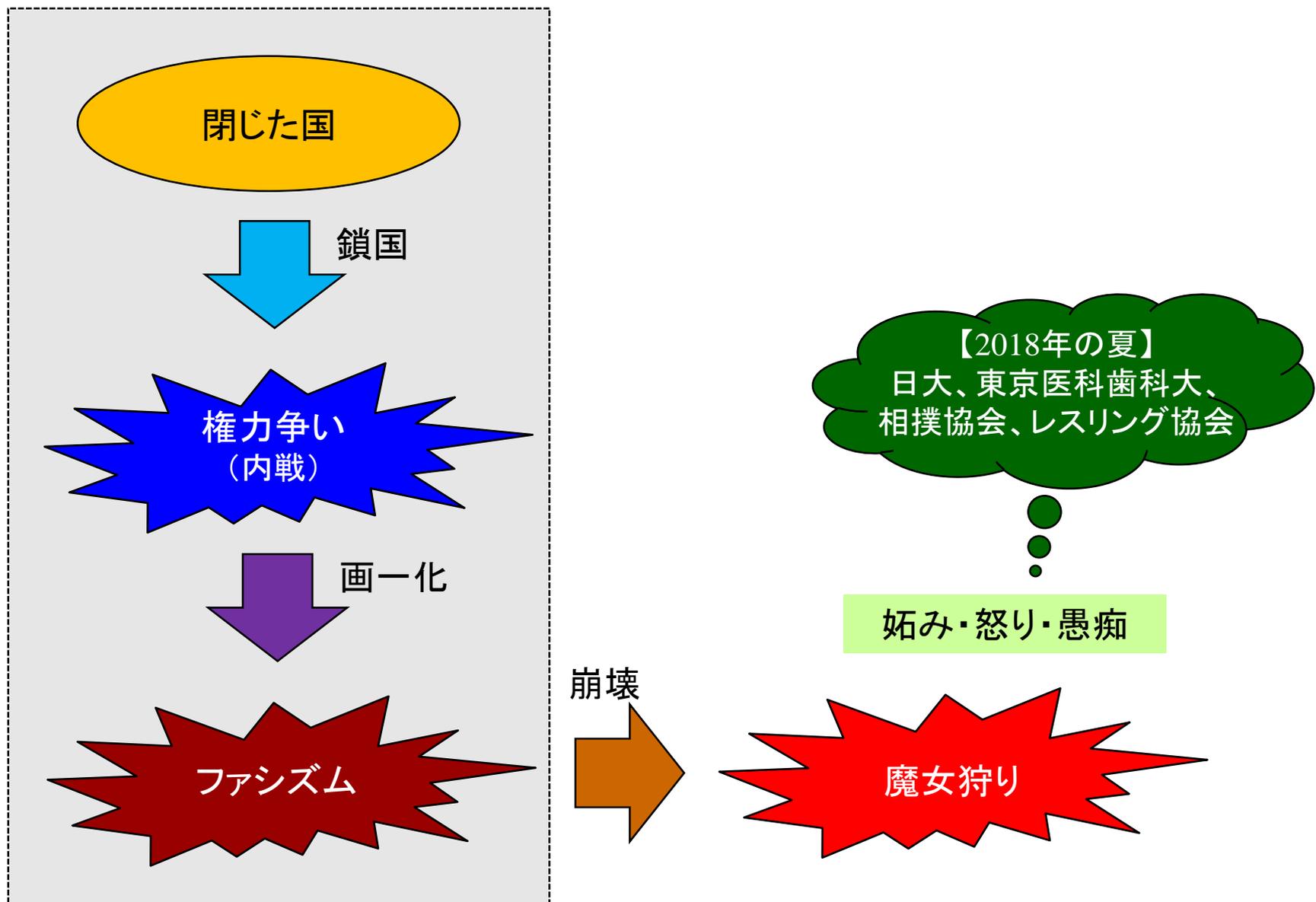
検索

# 「閉じた組織」と「開いた組織」



どちらを選ぶ？

# 「閉じた組織」の行方



# まじめであることの副作用

多く人は、政府、官僚、メディア、検察、大企業などをまじめに信奉しています。すると、信奉される側の、いわゆる「お上」の側も欠点を持たなくなってしまうという構図が生まれるのです。

これはどういうことかという、この構図では、「お上」の側に「信じてくれる人を裏切れない」という心理が働き、その結果、政府やメディアなど、情報の伝え手は絶対に間違えてはならないという「無謬の存在」信仰ができあがってしまうということです。そのため、彼らが少しでも間違ったことをすると、今度は無謬の存在を信じていた「民」が、あらゆる面でバッシングをすることになります。すなわち、無謬の対象をスター化し、そのスターが失敗すると、今度は叩き落すのです。

「まじめの罨」は、素直で従順な人たちが、絶対無謬の「お上」からすべての目的を与えられ、その無謬の中で暮らすという構図から生まれます。だからこそ、無謬の対象というのは憧れになったりスターになったりするのです。でも、その無謬性がいったんでも失われると、それを信じていた人々は手のひらを返して今度はブツ叩くのです。

こうした「無謬の存在」としてのまじめな組織と、それを叩く構図というのは、至るところで見つけることができます。

『まじめの罨』（2011.10 勝間 和代）より

# 異質なものを排除する社会

まじめな人は異質なものを排除します。異質なものを排除するというのは、まさしく怠け者たちにとって、自分たちのスキルセットをおびやかすものはダメだから排除したいという感情と同じです。法律用語でいうところの、「怠け者コミュニティの法的確信」みたいなものが揺らいでしまうとき、その人たちをコミュニティから排除しようとすべての意思が一致します。

「こんなふうにやったら、こういうふうには儲かるじゃないか、なんでお前たちはやらないんだ」みたいな話を聞くと、納得するよりも先に反発してしまうのです。なぜなら、そういう人たちが現れてしまうと、自分がいかに知的に怠けているかということを見せつけられてしまうからです。だから、もう二度と見なくて済むように、視界から排除したいのです。視界から排除するためには堀の中に落とすことも厭いません。

繰り返しますが、まじめな人は異質なものを排除します。多様性があること自体が許せないのです。自分の行ってきたものとは違う手法で物事に取り組む人を見たりすると、何を信じたらいいかわからなくなって自分のまじめさを維持できないのです。これは、許せないというよりも、防衛本能、闘争本能に近いと思います。

『まじめの罨』（2011.10 勝間 和代）より

# 攻撃性のはけ口

『人間が武器で身を固め、衣服をまとい、社会を組織することによって、外から人間を脅かす飢えや、寒さや、大きな捕食獣につかまるという危険をどうやらとり払い、その結果、これらの危険がもはや人間を淘汰する重要な要因とならなくなったとき、まさにそのときに、種の内部に悪しき淘汰が現われてきたにちがいない。こうなると淘汰の腕を振るうのは敵対する隣合わせの人間同士がする戦争ということになった。』

この主張に反論しようという気になる人間はほとんどいないであろう。人間がすべての外敵に打ち勝って、外敵をなくしてしまうと、その外敵に打ち勝つためにつちかわれた「攻撃性」のはけ口として、ついに人間同士が争う、というのがローレンツの観察である。

元来、群生の生物である人間にとっては、「連帯」がすべての行動に優位すべきであるのに、「連帯」とはまさに正反対の行動である「攻撃性」が人類のシンボルにまでなったのは大きな矛盾である。毎日の日常生活の行動の中でも、国家間の行動でも、実際、この矛盾に満ちあふれた現象がいたるところに見られるのである。

二人の人間が友人関係をもつという場合、友情、連帯と共存して、「優劣」「支配と服従」「なわばり確保」のための闘争がミックスされるといいかもしれない。

『続・逆転の発想』（1976.09 糸川 英夫）より

# 天敵のない社会

科学技術の進歩の結果として、二番目に考えられることは、四季の感覚がなくなるということである、夏も涼しい、冬でも暖かい、春夏秋冬の感覚がなくなってくる。さらにコンクリートの建物の中にいれば、台風が直撃しても、びくともしない。

このように、風雨、暑さ寒さといったものから人類はプロテクトされ、防衛線の中に安全な状態でいられることになる。

次に天敵。ほかの生物からの攻撃もなくなった。

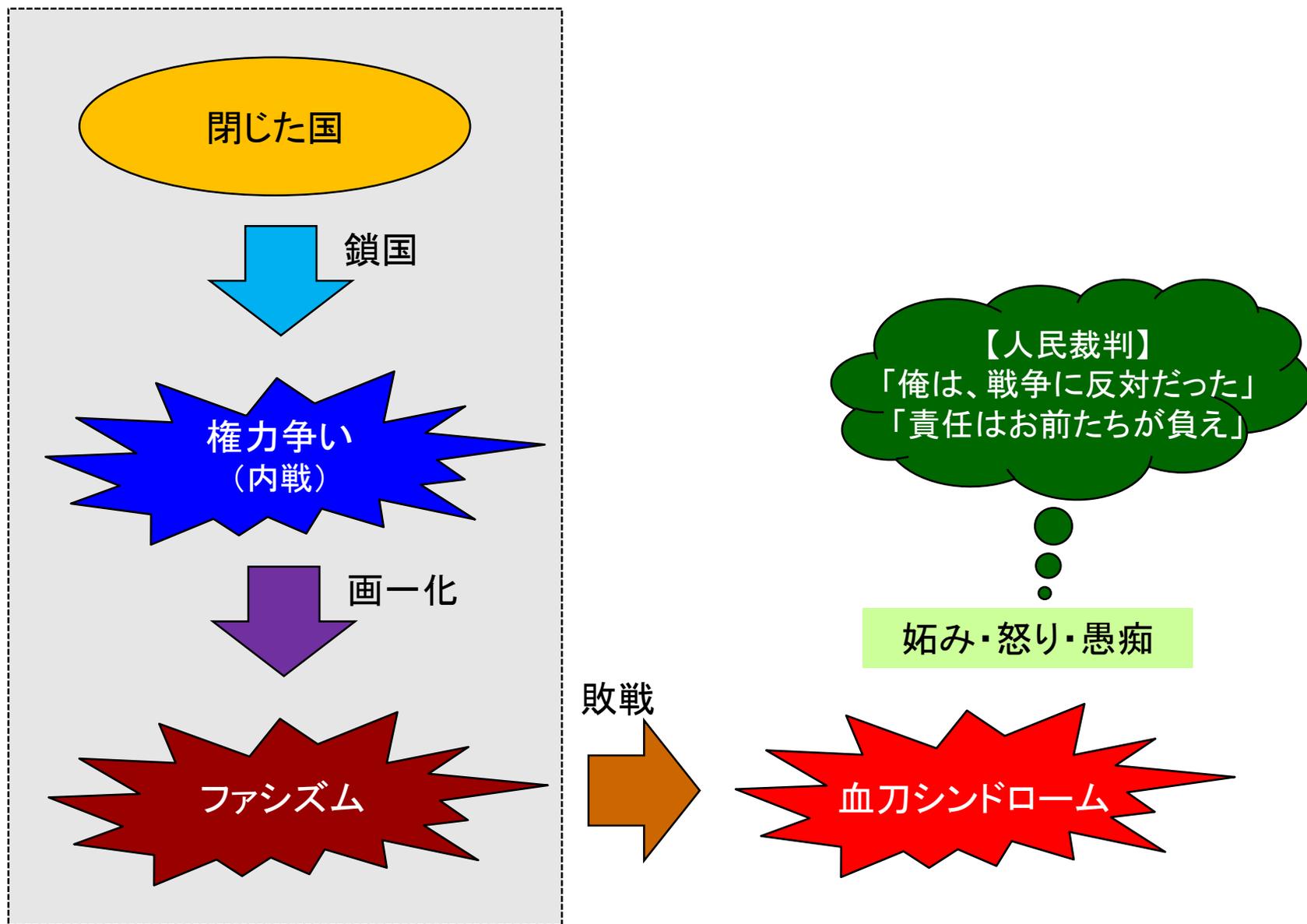
例の『不如帰(ほととぎす)』にしろ『椿姫』にしろ、ヒロインが肺病で死ぬ設定になっているが、最近の小学生にこの話をすると、「どうしてペニシリンを使わなかったの……」とくる。ペニシリンによってブドウ球菌を殺してしまったように、人類に敵対する生物は全部これを絶滅するという精神である。

これが技術の進歩によって可能になると、やはり人間はいわば非常に強固な城壁をもった城の中に入った状態になる。このように外からの攻撃が全く入ってこない、閉鎖された社会に入ってしまうと、人間は必ず人間同士殺し合いを始める。

これは数人でヨットに乗って世界一周した人に聞いた話だが、大洋に乗り出してから後のヨットの中では地獄の世界だった、という。四六時中、仲間げんかが絶えなかったというのである。これが閉鎖系の中に入れられた人類の宿命である。

『続・逆転の発想』(1976.09 糸川 英夫)より

# 歴史は繰り返す（20世紀）



# 「血刀シンドローム」が起きるとき (1/2)

日本は、昭和二十年(1945年)八月十五日、太平洋戦争に敗れて敗戦の日を迎えた。当時私は、東京大学の助教授で、航空研究所の所員だったが、敗戦直後に出くわしたのが「血刀現象」である。

血刀などとは、いかにも物騒で血生臭い話だが、このことを私に教えてくれたのは、航空学の教授・小川太一郎さんだった。

ある日、誰もいない一室で、小川さんは私に、こういった。

「糸川君、壁をよく見てごらん。いま、東京大学では血刀が振り回されている。血刀が振られて、次々に斬られている。斬られた人の血が、東京大学の壁という壁に飛び散っているんだよ。しっかり見ておきたまえ！」

小川太一郎さんは、日本の航空技術を高めるために奮闘努力され、私もずいぶんお世話になった方である。その小川さんも、ついに返り血を浴びた。

つまり、敗戦直前まで、もっとも戦争に協力し戦争を熱心に鼓吹していた人々が、日本が負けたとわかった瞬間から、こういい始めた。

「俺は、ほんとうは最初から戦争には反対だったんだ。ところが、おまえたちが『やれ、やれ！』っていうから、仕方なくやっただけさ。責任はおまえたちが負うべきだ」

(次頁につづく)

『復活の超発想』(1992.10 糸川 英夫)より

# 「血刀シンドローム」が起きるとき (2/2)

いわゆる「人民裁判」は、終戦とともに日本のいたるところで行われたが、それは東大でも起きたのである。小川さんも、血祭りに上げられた一人だった。

敗戦の年の十二月、小川さんは癌で亡くなられたが、東大病院にも入れてもらえず、病室で無念そうに虚空をにらむ姿が、いまも忘れられない。私もまさに間一髪で、血刀の犠牲になるところであった。なにしろ、日本軍の戦闘機を手がけた人間である。危うく難を免れたのは、私が助教授だったからだ。そのころの東大では、助教授など一人前の学者として認められるに値しない人間だったからにすぎない。

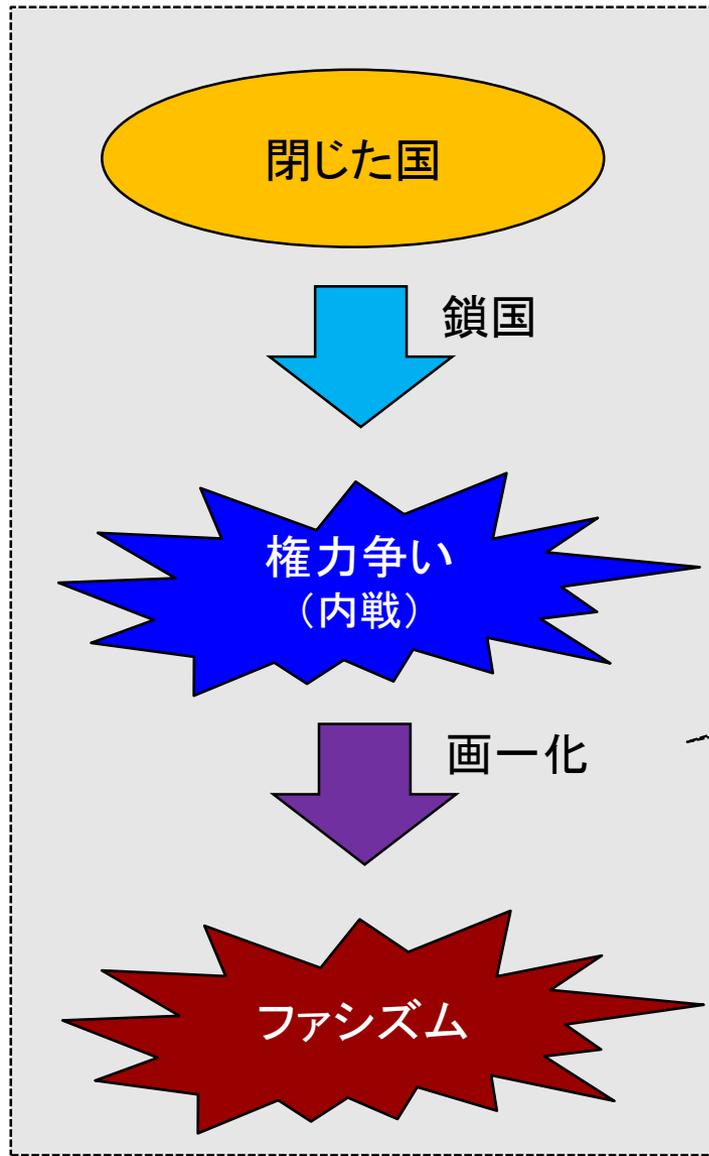
さて、いままた、日本では「血刀」が再現されている。

どこそこの証券会社が悪い、あそこの銀行に責任がある、とマスコミまでが騒ぎ立てる。今様「血刀シンドローム」だ。

西洋では、「魔女狩り」という忌まわしい歴史を残しているが、日本は1945年の「血刀シンドローム」を経て、新しい時代が築かれた。血刀を振ることが真に問題を解決する道ではないとわかったときに、新しい国民的目標が生まれた。新しいモラルも、そして人々のモラル(士気)も起きた。

『復活の超発想』(1992.10 糸川 英夫)より

# 歴史は繰り返す（21世紀）



多様性の排除

# とにかく、枠組みは自分で作れ

多くの人は、すべての枠組みは人から与えられるものであると考えて生きているからこそ、それに無理やり自分を合わせようとして苦しくなるのです。そうではなく、枠組みというものは自分の力で構築していくものなのだという視点が大切です。

では、枠組みを人から与えられないためにはどうすべきなのかというと、多様な情報源、多様な価値観、多様な経験を積むことが必要になります。そのためには、私は「システム外の行動を増やせ」という表現をよく使って説明しています。単純に言ってしまうと、「システム」とは、主に職場とか、日常のルーティンワークのことです。だから「システム外」とは、それ以外の場所や行動のことです。つまり、「システム外の行動を増やす」というのは、言い換えれば「よく遊べ」ということです。

自分が属しているシステムの内側でばかり行動するのではなく、その外側でどれくらいの時間を使っているのか、しかも、本当に純粋に、目的もなしにどれだけ遊べるかで幅広い視点を得ることができるようになります。

でも、ここで勘違いしないでください。「そうか、どんどん遊んだほうがいいのか」といって、テレビゲーム漬けになっている人がいたとしたら、その人はテレビゲームという枠組みの世界にハマっているだけということになります。

『まじめの罫』（2011.10 勝間 和代）より

# 常に別解を探せ

何らかの目的を達成しようとした場合、そのためにはどれくらいの手段があるのかを考えるクセをつけることを推奨します。たとえば、私はこの仕事を頼まれたけれども、いますぐにやる必要があるのか、最適な手段とは何かを考えると、解き方や答えは一つではないということを常に考えておくことが必要です。仕事では、解はいくらでもあるものです。だから、いままで通りの解き方で得られた答えが唯一の最適解だ、といったような考え方は危険です。

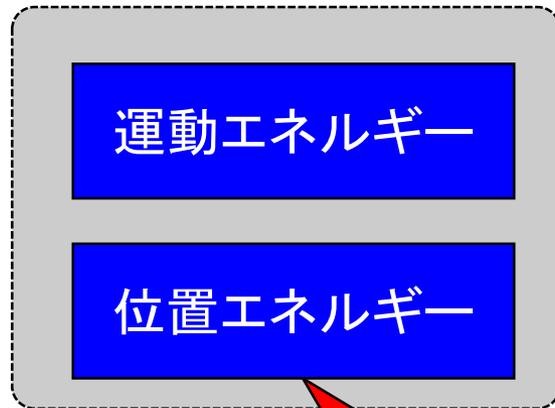
とりあえず身近にある解を探すものの、こっちにも抜け道はあるんじゃないか？ということをはたすら考え続けるのです。別解というのは自分なりの答えを出すことであり、その答えに対しては自分で責任を持たなければなりません。

先に例に挙げた、私のバイクの手袋で言うと、その時々には私が最適と思える解は変わっていくわけです。どこにも「唯一の正解」といったものはありません。

ところが、いつも人に責任をなすりつけたいまじめな人は、そういう曖昧さを許すことができません。なぜなら、これまで通りの、あるいは人から与えられたような解き方でやっていけば、仮に間違っただとしても、その間違いは解き方を考えた人のせいにはできるからです。まじめな人はこうして、自分のせいにはならないように生きているのです。

『まじめの罫』（2011.10 勝間 和代）より

# エネルギー保存の法則



【収益計算書】  
フロー（流れ）で考える

【貸借対照表】  
ストック（蓄え）で考える

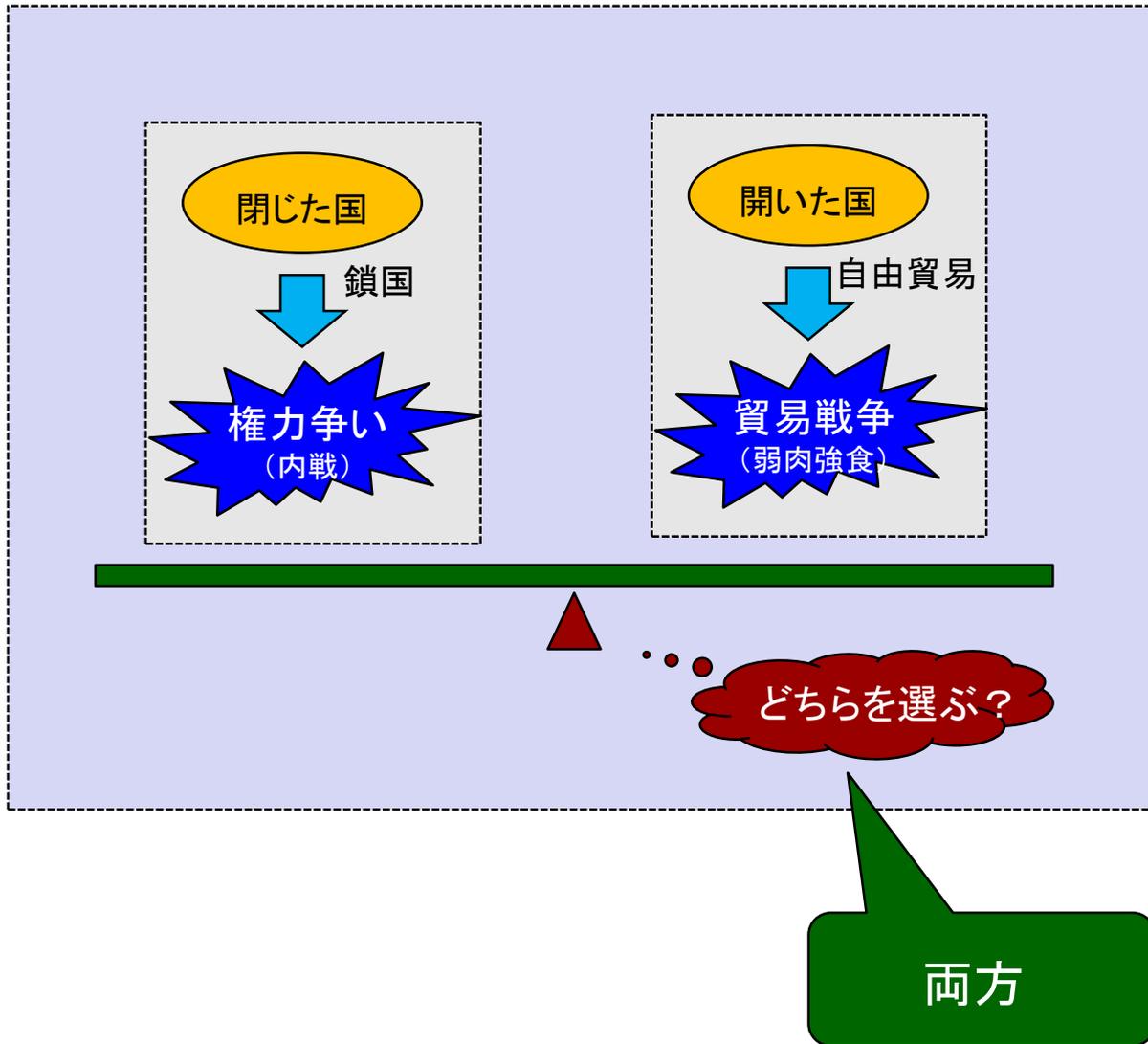
「場」の位置で変わる  
「場」の強さで変わる

【例】  
重力場  
電磁場

反転することがある  
(資産 ↔ 負債)

政府？ 官僚？  
メディア？ 検察？  
大企業？

# 最適化しない



それぞれ適当に!